

C型慢性肝炎に対するインターフェロン療法における 治療効果に影響する因子の検討

当院において10年間に経験した331例の成績から

森原 大輔	西澤 新也	福永 篤志
四本かおる	久能志津香	櫻井 邦俊
平野 玄竜	岩下 英之	上田 秀一
横山 圭二	坂本 雅晴	阿南 章
竹山 康章	入江 真	岩田 郁
釈迦堂 敏	早田 哲郎	向坂彰太郎

福岡大学医学部消化器内科

要旨：目的：当科での最近10年間のC型慢性肝炎患者に行われた、インターフェロン（IFN）療法の治療効果に影響を与える因子について検討した。対象と方法：2000年4月から2010年3月までの10年間に於いて、当科でIFN治療を行ったC型慢性肝炎患者451例のうち、解析可能であった331例において、IFN療法の治療効果に影響する因子について、統計学的に検討を行った。また、PEG-IFN（PEG-IFN）+リバビリン併用療法を行った84例については、C型肝炎ウイルス（HCV）コア領域のアミノ酸配列とIFN治療効果との関係についても検討した。結果：331例のIFN導入時平均年齢は54.8歳、IFN治療難治タイプ（著効率50%以下）とされるHCV serotype 1型かつ高ウイルス量例が62.9%を占めていた。HCV serotype 1型、高ウイルス量例におけるIFN治療別著効率は、IFN単独療法が18.2%、IFN+リバビリン併用療法が22.9%、PEG-IFN単独療法が25.0%、PEG-IFN+リバビリン併用療法が43.0%であった。IFN治療における著効（SVR）に寄与する因子は、多変量解析の結果、non-serotype 1型、低ウイルス量、治療法（PEG-IFN+リバビリン併用療法）、年齢（57歳未満）が独立因子として抽出された。また、HCVコア領域の70番目のアミノ酸変異は、治療無効となる独立因子であった。結論：この10年間に於けるIFN治療法は飛躍的に向上した。IFN治療を行う際は、HCV遺伝子型、ウイルス量、年齢、治療法、ウイルス側の遺伝子多型といったSVRに影響する因子を検討することにより、個々の症例に最適な治療ができると考えられた。

牽引用語：C型慢性肝炎、インターフェロン、Sustained virological response、Non-virological response